

果たせなかった約束

童句振興協会 広沢一岐

さねとうあきら先生からの賀状は、いつも筆の手書きでしたが、今年は印刷でした。日常のお手紙もすべて筆書きだったので違和感をおぼえました。ご入院中とうかがっていましたが、それなりに納得はしました。しかし、文意には力がこもっていました。

——戻りましたら創作民話の充実に力を尽くし、その職責を全うしたいと考えております。

実は数年前、次のようなお便りをいただき、私は話し合いの機会を持つことをお約束していたのです。今度こそ約束を果たさねばと思い、ご退院の日をお待ちしていました。

——わたしといたしましても狭山の人々によって人形劇や語りなどの形で子どもたちに広く親しんでもらいたいと念願しております。（中略）

自作のことばかり宣伝して申し訳ありません。広沢先生には「狭山」について教えていただくことも多く、追々お目にかかれれば幸いです。

さねとう先生が、所沢市から市内水野へ居を移され狭山市民となられたのは昭和六十一年のことでした。この年、先師・土家由岐雄先生の童句碑が智光山公園内に建立されました。私自身は、狭山市史戦後編の執筆に没頭していました。今から三十年前の話です。

さねとう先生は、平和を強く求めるあまり、反権力、反体制的であり、差別を無くそうとする強い信念故に過激なご発言が多くありましたので、きつい人との印象が強くなりました。しかし、私どもが土家先生の指導のもと始めた『童句』に深い理解を示されました。

文団連の活動を通じてお目にかかるようになり、律儀で謙虚なお人柄に触れ、改めてさねとう文学の世界に開眼させられました。

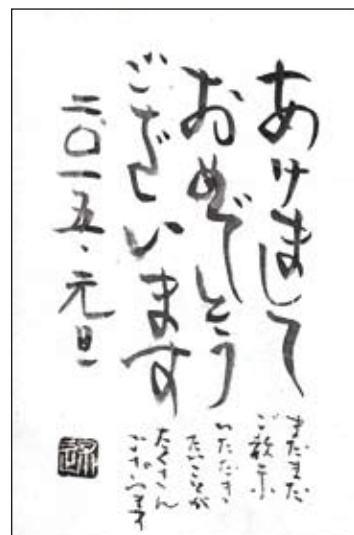
さねとう先生には、劇作家として登場なさった後、童話作家として大活躍なされました。特に民話をベースにした創作で大きな仕事をなさいました。

入間川地方の民話を核とした創作世界を、これから広げようとなさっていました。もっともっと書いて頂きたかったと思います。そして狭山市を盛り上げて頂きたかったと切に思います。

先生の訃報に接し、お約束をはたせなかった悔いが、胸を締め付けます。先生も又残念だったのではないのでしょうか。

今はただ、先生の遺された名作を読み、世に広めてゆくことをお誓いしたいと思うばかりです。

合掌



さねとう先生の手書き年賀状

編集後記

さねとう先生の訃報を知り、文団連でお世話になった方々から、直ぐに追悼のメールが飛び交い、これは会報としても特集号として発行し、ご霊前に供えたいと、急遽、原稿依頼をしました。お蔭様で総会にあわせて発行出来る事になりました。

原稿をいただいた皆様、ありがとうございました。

(高沢正夫)